

(17) 花垣神社 (はながきじんじゃ)

住 所： 三重県伊賀市予野 1 9 4

TEL : 0595-39-0526

参拝日：2013年5月8日、2014年8月20日

主祭神： 経津主命

祭 神： 武甕槌神、天兒屋根命、比売大神、相殿七大神



鳥居



神楽殿



鳥居と拝殿

欄干を渡ると春日造りの朱色の鳥居がみえてくる。その手前に天然記念物“花垣の八重桜 左へ100m、芭蕉の句碑はすぐ”と書かれた表示版が立っている。花垣歴史研究会の説明によると、「この句碑は、元禄3年(1690)芭蕉が予野を訪れて詠んだ句を碑石にしたものであるが、この碑石を再建したときの謂われ書きが花書き神社の棟札にあつて、池部寺の二代の住職の呼びかけで、天保6年(1835)村中総出で製法十町(一軒余り)の所から引き運んできて建立し、文字は左側面の名前の川口右文の筆によると記されてある。江戸時代に建てられた伊賀にある芭蕉句碑の数少ない(六基)の一つである。」と記されており、この句碑には下記の芭蕉翁の句が刻まれている。

“一里は皆花守の子孫かや”

説明によると、元禄3年(1690)芭蕉47歳の作。季語「花守」で春。芭蕉真蹟懷紙に「この国花垣の庄は、そのかみならの八重桜の科に備へられ侍りけるとかや、ものにも書きつたへられ侍りけるとかや、ものにも書きつたへられ侍れば」と前書する。奈良の八重桜は、伊勢大輔の「いにしへの奈良のみやこの八重ざくらけふ九重ににほいぬるかな」(『詞花集』)も歌にも有名な桜。『沙石集』等の説話集に、平安の昔、一条天皇の後上東門院が奈良興福寺の八重桜を京に移そうとしたところ、僧徒らが強く反対、后はその風雅心に感心し、伊賀国予野の庄を興福寺領に寄進、花垣庄となづけた。これより里人は毎年奈良に赴き花垣を結い、花の盛り七日間は宿直を置き守らせた、との話がある。三月下旬頃、芭蕉はここ花垣庄を訪れ、古の風雅を偲び、土地の人に挨拶の意を込めた即興句。句意は、「ここ花垣の庄は、その昔、奈良の八重桜の咲く頃は花垣を結い、里人が宿直をして桜の花守をしたという由緒深いところである。今でも、この一里の人たちは皆、花守の子孫なのであろうか。」と記されている。



本殿



本殿と狛犬



芭蕉句碑



御神木ナナミノキ

また、花垣神社は「奈良時代に予野から八重桜を都に献上した縁で、寛弘元年(1004)奈良の春日宮を勧請し、地元池部宮と共に祭祀してきた。棟札によれば、江戸時代の官榮二年(1624)、与野出身の藤堂藩・伊賀上野城代家老・初代藤堂采女によって再建された。拝殿、鐘楼等は藤堂采女の曾孫の「三国地志」の著者である藤堂元甫などによって再建された。同時に八重桜や蘭若池の藤の植え替えも行っている。」と説明されている。

鳥居をくぐり、しばらく進むと「花垣神社御鎮座一千年紀年 平成の大造営記念碑」が建っており、大造営事業の概要が記されている。御本殿、中門、幣殿、拝殿、神饌殿、割拝殿などの屋根瓦葺替えや改修、宝物殿、手水舎、大鳥居、御祭神標、案内標の改築、造営祈念碑新設、神宮遙拝所標石、山神碑、自然石灯籠、石段等の据え付修復、神域、境内の環境整備や東参道整備など。

さらに左側には御神木のナナミノキがあり、説明によると胸高周囲 1.81mでモチノキ科の常緑高木であり、本州(静岡県以西)四国、九州の常緑樹林内に生え、中国にも分布する。名は七実の意味で美しい実がたくさんなるためといわれる。中国名は冬青雌雄異株だそうである。

割拝殿を通ると、境内の向こうには明神造りの石の鳥居とそのすぐ後ろに阿吽の石の狛犬に守られた寄せ棟造りで平入りに破風がのった拝殿がみえる。その左手には推定樹齢250年、胸高周囲 4.41m、高さ36mの御神木の杉が2本そびえている。

朱色で春日造り本殿の階段の両脇にはアザラシのような石造りの珍しい狛犬は寝そべっていた。この造りからするとかなり古いもののようと思われる。

境内を囲む社叢はその他、サクラ、ヒノキ、ヒサカキ、ヒマラヤスギ、イヌマキ、クスノキ、スギ、クロマツ、ナンテン、アラカシ、サカキ、マンリョウ、カナメモチ、コシアブラ、サルトリイバラ、アオキ、ミツバアケビ、ノイバラ、タブノキ、スダジイ、ヤブコウジ、コウヤマキ、タカノツメ、モチツツジ、モッコク、フジ、ムクロジ、シラカシなどの多様な樹木が茂っていた。

宝物等は八重桜(県指定天然記念物 昭和12年11月指定)で、特記事項として、上野市予野は古代律令制の時代奈良興福寺の所領となり花垣庄に属した。芭蕉翁が「一里は皆花守の子孫かや」との句を残し花守の里を賞でられた。今に花を守る豊かな祭りが残されている。